



TITLE:

「資本の流通過程」における恐慌 の可能性について

AUTHOR(S):

角田, 修一

CITATION:

角田, 修一. 「資本の流通過程」における恐慌の可能性について. 経済論
叢 1974, 114(3-4): 153-171

ISSUE DATE:

1974-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/133582>

RIGHT:

經濟論叢

第114卷 第3・4号

資産再評価の政策評価……………	高 寺 貞 男	1
組織のコンティンジェンシー・セオリー について……………	赤 岡 功	13
マルクスの労働価値説……………	梅 沢 直 樹	35
「資本の流通過程」における 恐慌の可能性について……………	角 田 修 一	53
高度成長下の土地政策と大規模宅地開発……………	木 村 隆 之	72

昭和 49 年 9・10 月

京 都 大 学 經 済 學 會

「資本の流通過程」における 恐慌の可能性について

角 田 修 一

I は じ め に

『資本論』第2部「資本の流通過程」、とくにその第3篇「社会的総資本の再生産と流通」の課題と方法についての理解は、マルクスに拠る恐慌理論展開の方法と性格を規定してきた。その理解の主なものは、第2部第3篇の叙述が恐慌の諸可能性を示すだけでなく、資本の矛盾を内在的に含むことによってこれら諸可能性が展開する基礎・内容をも示している、としてきた。それらは、もっぱら表式的叙述の精緻化と展開によって恐慌の現実性を明らかにしようとするのである。例えば、

高木彰氏は、「産業循環論の方法とは『資本論』の方法のこと」¹⁾であるという視点から、「再生産表式の理論的課題が、資本蓄積の現実的動態過程を総括的・『全機構』的に把握する」²⁾ことであり、そこにおいては「資本制生産に固有な『内在的矛盾』=『生産と消費の矛盾』が構造的に論定されておらねばならない」³⁾といわれる。そして「長期的・趨勢的に実現される法則」ばかりでなく「拡大再生産の順調な進行から変調への転化、従って、資本の蓄積運動の産業循環としての現実的展開も課題として設定されねばならない」⁴⁾として、その議論を進めておられる。

井村喜代子氏は、「再生産表式分析は、資本流通と所得流通との絡みあい、

1) 高木彰「再生産表式論の研究」1973, 170ページ。

2) 同上, 104ページ。傍点一引用者。

3) 同上, 142ページ。

4) 同上, 241ページ。

生産と消費との絡み合いを解明することを通じて、生産が消費から『自立』し、労働者の消費を狭隘な枠内に制限しつつ発展する資本制生産においても、総資本の再生産の『正常的経過』のためには、生産は消費と直接・間接に、ある連繫を保っていなければならない関係にあるという矛盾をしめした⁵⁾といわれる。そして、『資本論』では拡大再生産における生産と消費との関連について十分な分析がなされていないとして、そこに残された問題、すなわち、部門間均衡条件 I. $(v+mv+mk)=II. (c+mc)$ が満たされても、I 部門の蓄積率・総投下資本拡大率と II 部門のそれとはいろいろな組合わせが可能であり、そのうち生産が消費から「自立」して拡大していく場合の状態を明らかにすることが「矛盾」を基軸とする解明に不可欠な課題とされている⁶⁾。

また二瓶敏氏も、「再生産表式分析は、たんなる流通の媒介運動の分析にとどまらず、生産と流通の両者を統一する資本の総再生産過程の把握を意味し、……資本主義的生産関係の再生産の総括的把握をなすのである」から「それはまたそこに内在する矛盾を総括する理論である」とされている。その矛盾とは「生産諸部門間の矛盾ならびに生産と消費の矛盾」であり、単純な商品流通における恐慌の可能性は「内在的矛盾によって基礎づけられ」、「資本の運動によって内容をあたえられ、現実性への転化の根拠をえて、実在的可能性に発展する」といわれている⁷⁾。

これらの諸見解は、第2部第3篇を事実上のマルクス恐慌論体系の枢軸的位置にあるものとみなしたために、本篇固有の課題と方法を見誤っており、さらにこの結果、折角いわれる「生産と消費の矛盾」の発現として恐慌を捉えようとしながら、結局のところ、矛盾にあらざるものに矛盾を求め、矛盾の運動形態・その累積と発現の論証に失敗していると思われる。

筆者は先の二瓶氏とくに代表されるように、第2部第3篇がいわゆる「生

5) 井村喜代子「恐慌・産業循環の理論」1973、35ページ。傍点一引用者。

6) 同上、43-50ページ。

7) 二瓶敏、社会的総資本の再生産と流通、見田石介・宇佐美誠次郎・横山正彦監修「マルクス主義経済学講座」下、1971、67-70ページ。傍点一引用者。

産と消費の矛盾」を「総括する」とは考えない。「生産と流通との統一」も第2部全体でいわれることであり、この「統一」をいうことと両者の「矛盾」をいうこととは論理的に、したがって『資本論』の叙述の上でも、区別されねばならないと考える。また、単純な恐慌の可能性が「資本の流通過程」で見いだす「基礎」・「内容」は「恐慌の究極の根拠」たる矛盾ではないと考えるものである。本稿はこうした主として恐慌論展開における方法論的な見解を述べるために、まず単純な商品流通における恐慌の可能性が「資本の流通過程」の叙述でうけとる基礎・内容とはいかなるものでなければならないかを論じ、このなかで第2部第3篇の課題と意義を明確にしようと試みる。そのうえで、次に予定される論稿において「恐慌の究極の根拠」を規定するにあたってこの篇がいかなる理論的意義をもつのかを明らかにし、この点から先の諸見解にみられる問題点を検討することにする。したがって以下の本稿と次稿とが一つの全体をなすことに留意されたいと思う。

II 単純な商品流通における恐慌の可能性

単純な商品・貨幣流通には、商品の売りと買いの分離＝販売不能、および諸支払の連鎖の中断・攪乱の可能性が存在する。

商品における「使用価値と価値との対立 *Gegensatz*、私的労働が同時に直接に社会的な労働として現われなければならないという対立、特殊な具体的労働が同時にただ抽象的一般の労働としてのみ認められるという対立、物の人化と人の物化という対立」⁸⁾は、私的生産と社会的分業にもとづく生産関係に「内在的な矛盾 *immanente Widerspruch*」⁹⁾である。この内在的矛盾を含んだ諸商品の交換過程は、商品と貨幣という二重の対立する異なった存在を生む（貨幣の必然性）が、この二重化は諸商品の交換過程を、物々交換という直接的同一性

8) 9) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, *Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Bd. 23, S. 128, 大月版全集, 第23巻第1分冊, 1965, 150ページ。(以下, *Das Kapital*, Bd. I, S. 128, 150ページとする)。

から、売りと買いとの区別された行為とする。両行為は、対立しつつ、売りは買いであるという同一性において「必然的に、相互補完的な」¹⁰⁾二つの変態 *die Metamorphose* であり、それらは、買うために売る、として統一されている。これは本質的な統一である。

ところが、分業は一つの自然発生的な生産有機体 *ein naturwüchsiger Produktionsorganismus* なので、これらの変態は「このような内的で必然的な相互一体性 *Zusammengehörigkeit* にもかかわらず、互いに無関心に存在し、時間的にも空間的にも分裂し、互いに分離しうるしまた分離した、過程の独立な部分でありまた諸形態である。」¹¹⁾ とくに、商品交換において販売こそ重要なのに、「だれも、自分が売ったからといって、すぐには買わなければならないということはない。」¹²⁾ こうしてこの変態が成功するか否かは偶然となる。

だから、売りと買いとは相互に円滑に移行できるかもしれないし、できないかもしれない。不断の不均衡化と均衡化とが現われるが、もし、相互の外的独立化が進行していけば、「両者が一つの全体の二つの本質的な契機をなしているというかぎりでは、独立した姿が強力的に打ち破られ、内的統一が強力的な爆発によって外的に回復されるような瞬間がやってこなければならない。」¹³⁾ この意味で、商品変態には恐慌の可能性および最も抽象的な形態が存在するといえるのである。

注意すべきは次のことである。商品生産の内在的矛盾は商品変態においてその発展した運動形態をうけとるが、それは、売りと買いとが分離しうるけれども分離したままではありえないとはいっているが、どのようにして、何故、何に

10) K. Marx, Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des „Kapitals“), Teil 2, *Werke*, Bd. 26-2, S. 509, 全集第26巻第2分冊, 1970, 686ページ。(以下, *Theorien*, II, S. 509, 686ページ)。

11) *Ibid.*, S. 509, 686-687ページ。

12) *Das Kapital*, Bd. I, S. 127, 150ページ。

13) K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, (Rohentwurf) 1857-1858, Anhang 1850-1859, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 113, 高木幸二郎監訳「経済学批判要綱」第1分冊, 1959, 118ページ。(以下, *Grundrisse*, S. 113, I. 118ページ)。

よって、この可能性（潜在的恐慌 *Krise potentia*, 矛盾）が現実性に転化するのか、強力的過程によってのみその内的統一を貫ぬくような衝突（絶対的矛盾）に至るのか、という「恐慌の諸条件」「恐慌の原因 *Ursache*」をも説明するものではない、ということである¹⁴⁾。

そこで、恐慌の単純な形態を「根拠づけられた内容」¹⁵⁾とし、「潜在的恐慌のより進んだ発展」¹⁶⁾を追跡するためには、単純な商品流通にとっては外的な「諸関係の一大範囲」＝「資本の諸形態規定」を展開することが必要となる。

この点で『資本論』第1部第3篇—第7篇は資本が生産し、生産されている過程を分析しており、そこでは商品交換が価値通りに行われ、生産諸手段も常に流通において見いだされることが前提されている。すなわち生産過程は流通部面との関連ではうまく進行しうることを前提しているといえる。従ってここではすぐに第2部「資本の流通過程」が上のような必要にどう答えているかの検討に入りたい。

III 抽象的な可能性（＝形態）の基礎（＝内容）としての資本循環

『資本論』第2部は「資本の諸変態とその循環 *Die Metamorphosen des Kapitals und ihr Kreislauf*」（第1篇）、とくに「貨幣資本の循環」の考察からはじまる。そこでは次のようにいわれている。「ここでは資本は、互いに関連し制約しあう一連の諸転化、すなわちそれぞれが一つの総過程の諸局面または諸段階をなしている一連の諸変態を通る価値として、現われる。これらの段階のうち二つは流通部面に属し、一つは生産部面に属する。これらの段階のそれぞれの資本価値は違った姿をしており、それぞれの姿に別々の特殊な機能が対応している。……それゆえ、この総過程は循環過程なのである。」¹⁷⁾「資本の循環過程は、流通と生産との統一であり、この両方を包括している。」¹⁸⁾こうした

14) *Theorien*, II, SS. 502-515, 677-696ページ参照。

15) *Ibid.*, S. 513, 692ページ。傍点—原文。

16) *Ibid.*, S. 513, 693ページ。

17) *Das Kapital*, Bd. II, S. 56, 65-66ページ。傍点—引用者。

ことが第2部の第1章で明らかになっているということは、第2部の対象が資本の商品・貨幣としての単なる変態ではなく、生産過程をも含む資本の独自な変態にあることを意味するものである。第2部の「資本の流過程」とは資本が流通している過程つまり資本の姿態変換を指示しており、もともとその内には一段階・局面として直接的生産過程が含まれているのである。『資本論』第2部がその第1部の叙述に依拠して再び「直接的に流通部面に現われているとおりの資本の一般的定式」、 $G-W-G'$ という運動・循環、にたちかえるところから出発すると考えれば、 $G-W\cdots P\cdots W'-G'$ として再規定された循環がまず登場してくるのが当然だといわなければならない。ここに単なる商品流通とは異なる資本の流通の独自性があるからである。

ここで直接的生産過程は資本循環・回転・総運動における不可欠の一段階として、流通部面に属する二つの変態 $G-W$ と $W'-G'$ に対して実質的な変態をなしている。だからこそ第2部において、そのくり返しの結果としての貨幣蓄積（第2章第3節）や準備金（同第4節）、生産・労働期間の長さの条件となる諸事情と回転の相違、循環期間やその諸成分の割合が生産過程の規模に与える影響（第15章）、労働手段が機能する特有な仕方から生ずるその価値の流通の仕方（第8章以降）、などの考察がなされている。しかし、直接的生産過程はあくまで流通との統一において循環・回転の一契機として考察されていることに注意せねばならない。すなわち、ここでは直接的生産過程の「本性 Natur は本書の第1部ですでに詳しく説明されている」¹⁸⁾ ものとして捨象されており、次の「本来の流通」²⁰⁾ と内的な統一にあって「実質的な変態」をなす一契機として直接的生産過程が扱われているのである。

18) *Ibid.*, S. 64, 74ページ。「資本の流過程」をこのように「生産と流通との統一」において把握することは、『経済学批判要綱』にすでにみられる。そこではまず「生産と価値増殖との統一」(*Grundrisse*, S. 310, II. 335ページおよび S. 975, V. 1105ページ)の一契機として本来の流通を取扱い、次いで「資本の循環それ自体すなわち資本の通流 Umlauf」(*ibid.*, S. 413, III. 450ページおよび SS. 975-976, V. 1105-1106ページ)を考察している。

19) *Das Kapital*, Bd. II, S. 42, 49ページ。

20) *Ibid.*, S. 69, 80ページ。および *Grundrisse*, S. 513, III. 565ページ。

一方、資本の循環における $G-W$ と $W'-G'$ が「本来の流通」といわれ、 $W'-G-W$ の全運動は「産業資本の総流通過程」²¹⁾といわれる。 $G-W$ が資本の生産資本機能のための準備機能＝段階であり、 $W'-G'$ が商品に合体されている剰余価値実現の機能＝段階であることはいうまでもないが、これら二つの段階は、資本が本来の流通過程としては単純な商品変態の過程であることを変更するものではない。価値増殖そのものは貨幣資本や商品資本の機能ではない。それらはただ貨幣や商品としての機能を行うのであり、両者の相違は貨幣と商品との相違でしかない。この意味で、資本は一般的商品流通の中でその独自の循環を行うといっているのであるが、以上のことは資本主義的生産の商品生産としての本質から出てくることなのである。

このように『資本論』第2部の対象を狭い意味での「本来の流通」とみるのではなく、生産過程をも含む資本の循環過程とみることは、流通を再生産の媒介としてみるということでもある。つまり、循環過程とは再生産過程でもある。第1部での再生産過程の分析は資本が流通部面で行う変態を捨象していたが、いまや再生産過程は生産と流通とが相互媒介をなす資本の循環過程として登場してくる。したがって資本の流通＝循環過程論はそれ自体同時に一つの再生産過程論でもある。マルクスが『剰余価値学説史』のなかで当時の「流通過程」篇のことを何度も「資本の再生産過程または流通過程についての篇」といい、再生産過程と流通過程とを同義に使っているのはこのためである²²⁾。この点で、山田盛太郎氏がかつて『経済学大辞典』の「再生産表式」の項目の冒頭に書かれた次の文は問題を含んでいると思う。

「再生産過程は、これを社会的総資本の再生産の総過程としてみれば、それは、資本の直接的生産過程（それは、a. 労働過程とb. 価値増殖過程との統一として現われる）と厳密な意味における流通過程（それはa. 循環とb. 回

21) *Ibid.*, S. 69, 79ページ。

22) *Theorien*, I, S. 81, 104ページ。他にも I, S. 78, 100ページ, S. 319, 428ページ, II, S. 511, 690ページ, S. 513, 693ページ, 等をみられたい。

転との過程として2段に考察される)との総括である。……マルクスの『資本論』第3篇「社会的総資本の再生産ならびに流過程」は再生産過程の分析に当てられ、マルクス経済理論体系の骨髄ともいふべき部分に当たる。」²³⁾

山田氏のこの文は、『資本論』第2部第3篇第18章のはじめにある「資本の再生産過程は、この直接的生産過程とともに本来の流過程の兩段階をも包括している」²⁴⁾という文に依拠したものと思われるが、ここで「本来の流過程の兩段階」とは先に明かなように $G-W$ と $W'-G'$ の兩段階のことであって、氏の表現にある「厳密な意味における流過程」もこの兩段階のことではなければならない。ところが、氏の表現をみると、第2部の第1・2篇がいわば「本来の流過程論」で、第3篇が「再生産過程論」として第1部と第2部の兩方を「総括」するものという見方があるように思われるが、資本循環・回転論を「本来の流過程」の考察に一面化し、再生産過程論を第3篇のみに課するのはまちがっているし、第3篇が後にみるように個別資本のからみあいの総体を把えるというのならともかく、ここで何か第1部の直接的生産過程論と第2部第1・2篇の流過程論とを「総括」するというように見るのは正しい見方とはいえない²⁵⁾。

ところで、以上のことからわかるように、資本の本来の流通において、従来の価値で生産資本の要素を手に入れることや、価値増殖された資本の担い手たる W' を価値通り実現することは、循環・再生産過程の正常な進行にとって必然的条件となる。ところが、個別資本の循環にとってそれは全くの外的な事情

23) 中山伊知郎編『経済学大辞典』I, 1955所収。95-96ページ。

24) *Das Kapital*, Bd. II, S. 351, 429ページ。

25) 富塚良三氏が最近の「久留間教授への公開質問状」なる副題の論文において、『資本論』第2部第3篇が「第2巻の流過程分析を総資本の再生産過程把握の観点から総括する位置にある」といわれるのも、この山田氏の影響かと思われる。富塚氏はこうした観点から『学説史』でマルクスが「それ自体同時に再生産過程であるところの流過程」というのは現行『資本論』第2部第3篇でなければならないとされるが、既にのべたように、これは「流過程」篇全体とみるのが正しい。(同氏、恐慌論体系の展開方法について、『商学論集』41巻7号、1974・7、241ページ)なお、山田氏の主張のたち入った検討を行った次の論文を参照されたい。八尾信光、再生産表式論の意義づけにかんする一論点について、『大阪市大論集』第19号、1974・9。

に属する偶然的な条件でもある。ここでもし、本来の流通における何らかの阻害がしばらくでも続くと、生産も阻害され、全過程が停滞状態になることは明白である。我々がこれまでみてきたところでは、何故、現実はこの資本の継起的な過程に中断や停滞が起こるのかを明らかにしえないが、ともかくまず、先に見た単純な商品流通における「恐慌の一般的可能性は、資本の変態の過程それ自体のなかに与えられている」²⁶⁾ということができる。それは、「実際には、発達した商品流通と貨幣流通とは、資本の基礎のうえにのみ nur auf Grundlage des Kapitals 行われる」²⁷⁾、すなわち、資本が商品生産でもあるという一面の本質から出てくることであって、この意味で、「前記の諸形態が、ここ〔引用注—資本の再生産過程＝その流通のこと〕ではじめて一つの内容 einen Inhalt を、すなわち、これらの形態がそれに基づいて自己を表明しうる一つの基礎 eine Grundlage を、獲得することが証明される」²⁸⁾といわれるのである。ここでいう「内容」＝「基礎」とは資本の変態運動自体に他ならず、恐慌の単純な形態＝可能性はここでその存在の現実の根拠を見だし、資本の流通を舞台にその現実的姿を表わすということがわかる²⁹⁾。資本の循環の中には、その循環の攪乱・困難という「恐慌の最も単純な内容」³⁰⁾が存在するといえるのである。

しかし、これはけっしてまだ恐慌の「根拠づけられた内容」ではない。なぜなら、単純な商品流通と資本の形式的変態とは先に見たように同一の内容をなし、商品生産に内在的な矛盾が資本の中に存在することを証明はするが、これによつては、資本の変態過程の各契機が互いに自立化しうるという可能性はいわれても、なぜ、なにによって、またどのようにして、これが現実化するのかということの根拠はまだ明らかにされないのである。資本の変態においてもや

26) *Theorien*, II, S. 514, 694ページ。

27) *Ibid.*, S. 513, 693ページ。傍点—引用者。

28) *Ibid.*, S. 511, 690ページ。傍点—引用者。

29) 『経済学批判要綱』には次のように述べられている——「この可能性は、その概念にふさわしい典型的に完成した流通の基礎的諸条件が存在しているところ以外では、実現されえない」(*Grundrisse*, S. 112, I, 118ページ)。

30) *Theorien*, II, S. 513, 692ページ。

は、恐慌は起こるかもしれないという偶然的・外面的規定にとどまっている。したがって、まず、以上の「基礎」・「内容」は恐慌の可能性が現実性に転化する根拠とはいえない、ということを確認する必要がある。

このように、マルクスが資本の再生産＝流通過程という時に、とりわけ現行第2部第3篇のことを指示しているのではないし、その過程で恐慌の抽象的可能性の形態が一つの「基礎」・「内容」を獲得するというのは、「資本の流通過程」論全体で考察される資本の変態過程には、生産と流通等の各契機が内的統一になればならない必然性がある一方で資本の商品生産としての本質からその契機が自立化し、その内的統一が保持しえない可能性＝偶然性がある、ということの意味しているのである。これに対して現行第2部第3篇の分析はどのような点を明らかにしているのかを次に検討してみよう。

IV. 可能性の内容的拡大と発展した恐慌の形態

——社会的総資本の循環——

以上のことは、個別資本の循環という立場から把握されたことではあるが、社会的資本にも妥当する。しかし、社会的資本の運動＝循環は、個別的諸資本の変態のからみあいから成りたっているのであるから、この関連を考察しなければ、社会的資本の循環の分析は十分でない。たとえば、個別資本の $G \rightarrow W(Pm)$ の Pm は資本主義的商品つまり他の資本の売りである必要はないし、また、 $G \rightarrow A$ の労働力ははじめから資本なのではない。 $W' \rightarrow G'$ における貨幣は他の資本家のものである必要はなく、労働者からの、あるいは資本主義的生産者以外の生産者たちからのものであってもよい。また、資本家による貨幣投下だとしても、剰余価値部分からの消費支出という形もとるし、前貸資本の補填でもありうる。こうして社会的資本の循環は、その一つの独立化された部分の運動を問題にするだけでは不十分で、いまや個別的諸資本の循環の総体が問題にされなければならない。しかも「この関連を貨幣と商品との単なる形態転換から説明することはできないのである。」³¹⁾

この社会的総資本の循環が『資本論』第2部第3篇の対象である。この研究の必要とその方法は、個別資本の商品資本循環を考察したときに指摘されている。マルクスはそこで次のように述べている。 $W' \cdots W'$ という形態は、すでに増殖された商品価値の総流通 $W' - G - W$ が循環を開始させ、生産過程をばさんで、その結果たる W' で終わる。第1に、 W' で終わるということは必ず $W' - G'$ を始めねばならないということなので、この形態は循環の継続つまり再生産を含んでいる。そして、最初と最後および中途にある商品資本が、「再生産過程の恒常的な条件」³²⁾ となっている。第2に、この循環形態では、総商品生産物の生産的および個人的な消費が正常な進行の条件として前提されている。すでにその第1段階で資本価値と剰余価値の循環を含み、とくに剰余価値は平均して一部分は収入として支出され、一部分は資本蓄積の要素として機能する。第3に、 $W' - G - W(Pm + A)$ と $w - g - w$ ですでに最初から他人の商品を前提している。だから、「この循環そのものが次のようなことを要求する。すなわち、この循環を、ただ、循環の一般的な形態として……考察するだけではなく、また同時に、いろいろな個別資本の総計すなわち資本家階級の総資本の運動形態として考察することを要求する……。例えば、われわれが1国の1年間の総商品生産物を考察して、その一部分がすべての個別事業の生産資本を補填し他の部分がいろいろな階級の個人的消費に入っていく運動を分析するならば、われわれは $W' \cdots W'$ を、社会的資本の運動形態としても、また社会的資本によって生産される剰余価値または剰余生産物の運動形態としても、考察するのである。(中略) ……この運動は、いろいろな問題、すなわち、個々の個別資本の循環の考察によって解決されるのではなく、そのような考察では解決が前提されていなければならないような諸問題を解決する」³³⁾。

以上が新しい研究方法をもってする、新しい研究の課題である。そこでは、

31) *Das Kapital*, Bd. II, S. 104, 125ページ。

32) *Ibid.*, S. 98, 117ページ。

33) *Ibid.*, SS. 100-101, 120-121ページ。傍点—マルクスのもの。

一般的＝社会的，すなわち各個別資本に共通な形態としてではなく，資本と資本，資本と収入との絡みあい・相互制約のなかにあるところの社会的総資本が，それ自体として考察される。それは，年間総生産物の価値的・素材的補填運動によって明らかにされる。そうすれば，個別資本の循環との区別と共通性，資本家と労働者との再生産＝維持の仕方も明らかになる。これが『資本論』第2部第3篇の課題と方法であり，その第1・2篇との関連でもある。

この社会的資本の運動は，社会的資本の「総過程」，個別的諸資本の「諸回転の総体」・「総体としてみた循環」³⁴⁾といわれている。したがって，第3篇の対象も第1・2篇と同様に生産過程と流通過程との両方の統一である。しかし，生産過程は各個別資本自体が行っているものであり，その本性はどの個別資本にも共通なものとしてある。その社会的本性は『資本論』第1部で考察され，またそれで充分なので，ここで社会的総資本の生産過程をその本性において直接とりあげることは必要としない。『直接的生産過程』の分析の際に現われる諸規定，即ち，生産力の累進的増大，資本有機的構成の累進的高度化，剰余価値率の累進的増進などは，ここでは，直接的な考察の対象とならぬ所以はこれである。³⁵⁾ここでは，生産過程を商品資本の運動の単なる一契機として通過すればよいのである。年間総生産の価値・素材補填によって資本と収入の各部分がどのように補填されるかを純粋に明らかにすれば，社会的再生産過程がどのように行われるのかは明らかとなる。そこに個別資本の再生産過程との区別と関連があるからである。マルクスが，「われわれの当面の目的のためには，再生産過程は， W' の個々の成分の価値補填と素材補填との両方の立場から考察されなければならない」³⁶⁾と述べ，また，「そこで，今度は，社会的総資本の構成部分としての個別的諸資本の流通過程（その総体において再生産過程の形態をなすもの）が，したがってこの社会的総資本の流通過程が，考察されなけ

34) *Ibid.*, S. 352, 430ページ。

35) 山田盛太郎氏によるかかる限定づけは全く正しい。同「再生産過程表式分析序論」『経済学全集』第11巻「資本論体系」(中)，1931年，所収。同，1948年復刊版，7ページ。

36) *Das Kapital*, Bd. II, S. 392, 483ページ。

ればならない」³⁷⁾と述べているのは、このような対象把握の方法からなのである。

また『資本論』第3部冒頭の一節もこうした意味で理解されねばならない。

「それ（直接的生産過程——引用者）は現実の世界では流通過程によって補われるのであって、この流通過程は第2部の研究対象だった。第2部では、ことに第3篇で、社会的再生産過程の媒介としての流通過程の考察にさいして、資本主義的生産過程を全体としてみればそれは生産過程と流通過程との統一だということが明らかになった。」³⁸⁾これは次のような意味である。『資本論』第2部が資本の変態＝循環をとりあげる以上、直接的生産過程も生産資本の姿で含まれており、これを排除することはできない。しかし、それ自体は第1部の考察内容だったので、第2部ではそれを媒介する流通での形態転換が研究の主な対象および内容となる。ことに第3篇はこの対象を社会的な絡みあいにおいて明らかにした。生産と流通の各々の本性が考察され、それらが互いに前提しあい、条件をなしあっていることが両方の面から明らかになっているのだから、資本は全体として両過程の統一であることはもはや自明である。マルクスはこのように述べているのである³⁹⁾。

ところが、Iで紹介した高木彰氏は、第2部第3篇は第1部と第2部の総括理論だという山田盛太郎氏や二瓶敏氏らと同様の立場にたって、この第3部冒頭文を次のように理解される。「ここでは第2部『資本の流通過程』は、第1

37) *Ibid.*, S. 354, 432ページ。傍点—引用者。

38) *Ibid.*, Bd. III, S. 33, 33ページ。傍点—引用者。この第3部冒頭文節はエンゲルスによって大幅に補足、訂正されたものである。ここでは佐藤金三郎氏の紹介によるマルクスの原文の方が、ある意味では、より本稿の意図を明確にするかもしれない。次の、佐藤氏による解説の一部を参照されたい。

「[すでにみたように、生産過程は全体として考察すれば生産過程と流通過程との統一である。このことは流通過程を再生産過程として考察したさいに（第2部第3章）、よりくわしく論究された。】」（同、『資本論』第3部原稿について曰、「思想」580号、1972年10月号、112ページ）。

39) エンゲルスは、「第3部こそ……社会的再生産過程のマルクスによる叙述の最終の成果を展開する」（『資本論』第2部序文）といい、「最初の二部の各々は、この過程（引用注—資本の統一的な全運動過程）の二つの主側面のひとつだけを扱うことによって、それは内容上では補足を必要とするものとなり、形式上では一面的、抽象的となった」（全集第22巻、433ページ）といっている。エンゲルスはこうした理解のもとに先のような第3部冒頭文節の大幅な補足、訂正をしたのであろう。

部の生産過程を補足するものとしての流通過程 $W-G-W$ と、生産過程と流通過程との統一としての『資本主義的生産過程』の両者を研究対象とするとされている、これは、資本循環論未確立に拠る第2部についての「二段階的論理構成を採る方法」⁴⁰⁾である、と。氏によれば、1877年以降の「資本循環論」の確立によって、第2部第3篇において、『資本の生産過程』における資本蓄積の動態に基本的に規定されるものとしての総資本の動態過程を把握することが要求されるにいたるのであり、資本主義的特質を表示するものとしての再生産の動態過程の総括的把握が不可欠の課題として設定される⁴¹⁾のである。しかし、すでにみたように、本来の流通過程を再生産過程の媒介・条件として考察すること自体が生産と流通とが全体として内的統一をなす資本の循環過程を明らかにすることであり、しかもこのことは、ここで直接的生産過程をその本性において直接とりあげることを意味しない。両過程の統一を明らかにすることと、『資本論』第1部と第2部との「総括的把握」を行うこととは区別されねばならないのである。氏らの第2部第3篇の課題把握には以上の点で一つの誤解があると思われる。

さて、こうした課題をもつ第2部第3篇では、社会的総商品 W' の各要素の「総過程で演ずる役割」が考察されるので、資本の貨幣や商品としての単なる形態転換を基礎とする恐慌の可能性の形態は、ここでさらに新しい基礎をみいだす。それは資本の「社会的再生産の条件」を基礎とする形態となる。

総生産物の価値・素材補填をみると、個人的消費手段の生産物は、その部門Ⅱと生産手段生産部門Ⅰの資本家による追加労働者を含めた賃金支払→労働者の消費支出によって販売され、Ⅱ部門はこれによって前貸資本を補填し追加生産要素を確保せねばならない。一方、Ⅰ部門は、両部門で新たな生産物に価値移転した毎年の生産手段を補填し、さらに拡大再生産の物的要素を供給せねばならない。資本家による貨幣支出は還流し、生産物は過不足なく供給されねばな

40) 高木彰, 前掲書, 86ページ。傍点—引用者。

41) 同上, 95ページ。

らず、その中に兩階級の消費支出も含まねばならない。そのうえに、固定資本回転の特殊性によって、一方で販売のみを行って貨幣蓄蔵をする側と他方で貨幣のみを投下して固定資本を更新する側とが不可避免的に生ずるので、この両方が一致せねばならない。資本蓄積においても、一方的販売によって蓄積に必要な貨幣蓄蔵を行う側と現実投資する一方的購買の側とが生まれ、この両方も価値額で一致することが必要である。また生産期間が長いために何年にもわたって一方的な生産物の吸収を行うグループには、それにみあう一方的な販売が必要である。貨幣材料の再生産も行われねばならない。そして蓄積率の変化を含め生産物各要素の違った組合せが困難なく進行することが必要となる⁴²⁾。

これらはすべて、「正常な転換のための、したがって単純な規模なり拡大された規模なりでの再生産の正常な経過のための、この生産様式に特有ないくつかの条件」であり、「商品生産が資本主義的生産の一般的形態だという事実」がこれを生み出すのである⁴³⁾。先にみた個別資本の変態における必然的条件が、この資本の変態の絡みあいに含まれることが理解されるであろう。これらの条件は、兩部門の諸要素の構成が一定の内的統一にあること、その中に資本流通と所得流通との、生産および蓄積と労働者の個人的消費との、相互制約性があること、を示している。また、これを通じて社会的総資本の生産過程と流通過程との統一、相互移行が行われることを示しているのである。これらは資本主義的生産の一つの本質を表現している。直接的生産過程では、剰余価値率と労働力人口が「直接的搾取の条件」であったが、この「再生産の条件」は直接的搾取の「実現の諸条件」である。二つの条件は異なったものである。実現の諸条件において、総生産物は「すべて売れなければならない」し、売ることができる。これは一面の必然であり本質である。

ところが、これが以上の再生産の諸条件においてうまくいかなければ、剰余価値のみならず前貸資本さえ実現しないこともありうる⁴⁴⁾。その場合、「これ

42) 久留間敏浩編「マルクス経済学レキシコン」⑥、恐慌Ⅰ」1972、参照。

43) *Das Kapital*, Bd. II, SS. 490-491, 613ページ。

44) *Ibid.*, Bd. III, SS. 253-254, 306-307ページ。

らの条件はまたそれと同じだけ多くの、正常でない経過の条件に、すなわち恐慌の可能性に、転化」⁴⁵⁾しているのである。したがって、恐慌の単純な可能性は、第2部第3篇の社会的総資本の循環における、年間総生産物の転態と様々な貨幣蓄蔵とその投下という広い範囲にわたる諸条件において、その拡大された内容を獲得することになる。しかも実現の諸条件における困難は社会的総資本の生産と流通の相互移行を困難にする。したがって、「資本の総流通過程またはその総再生産過程は、資本の生産部面とその流通部面との統一であり、両方の過程を自己の諸部面として通過するところの一過程である。この過程の中に、さらに発展した恐慌の可能性または抽象的な形態が存在する。」⁴⁶⁾ 同様に、「生産過程（直接的な）と流通過程との分裂〔によって〕、商品の単なる変態のところで明らかにされた恐慌の可能性は、もう一度、しかもさらに進んで、展開される。両方の過程が相互に円滑に移行せず、相互に独立化するようになれば、そのときには恐慌がおこっている。」⁴⁷⁾

45) *Ibid.*, Bd. II, S. 491, 613ページ。

46) *Theorien*, II, S. 514, 694ページ。

47) *Ibid.*, S. 508, 686ページ。ここで、本文中に多く引用した『剰余価値学説史』が書かれた時期（1861—63年、23冊のノート「経済学批判」、副題「第3章 資本一般」）の「資本の流通過程」構想・叙述について述べておかなばならないだろう。マルクスは『要綱』に続いて、このノート第7冊でアダム・スミス批判と不変資本の再生産、第10冊でケネー「経済表」などの検討を行い、これを通じて、資本の流通＝再生産過程では、その形態諸規定だけでなく、『要綱』では明確に資本一般の範囲外で扱われるとしていた貨幣流通や、資本と資本、資本と収入との交換、生産と個人的消費との関係、をも含ませることの必要を意識し、個々の資本にとっての価値・素材補填という形である程度こうした課題を「資本の流通過程」の章に含ませようとしていた。しかしなおその当時、「資本と利潤」＝「完成した資本」の章こそが「全体として、流通過程と生産過程の統一として、再生産過程の表現として現われる」と考えられていたこともあって、「社会的総資本の流通過程」の課題を「流通過程」章に設定するには至らず「資本と利潤」章にその説明が求められた。それゆえ、本注の示す文の書かれたノートの中で、「流通過程」の「項目そのもののものでは、再生産過程も、この再生産過程のなかでさらに発展した恐慌の基礎 Anlagen も、ただ不完全にしか説明されないものであって、『資本と利潤』の章でその補足 Ergänzung を必要とする」(*Theorien*, II, S. 514, 693-694ページ。傍点引用者)と述べているのである。この補足が次の段落（注46の文章）の「総流通過程またはその総再生産過程」把握であり、この表現として有名なマルクス「経済表」が作製されたと考えられる。それはマルクス自身のエンゲルスあて手紙の中で、この「経済表」は「総再生産過程を包括するものだ。……これはばくの本の最後の諸章のうちの一章のなかに総括として載せるものだ」（岡崎訳「資本論書簡」(1), 340ページ)と述べていることから推察しうる。この手紙のいう「一章」が、1863年1月の「資本と利潤」篇

以上の如く、「資本の流通過程」において恐慌の抽象的可能性の形態は、社会的総資本の循環を基礎として、拡大された内容規定（諸資本のからみあいの偶然性）とそれによる生産と流通との分裂・自立化という発展した恐慌の形態とを、うけとるのである。

それでは何故にこうしたことがいえるのか？ マルクスはその理由として、「なぜならば、均衡 *Gleichgewicht* は——この生産の自然発生的な状態では *bei der naturwüchsigen Gestaltung dieser Produktion*——それ自身一つの偶然なのだから」⁴⁸⁾と述べているだけだが、この意味は、「現実にはこの部面（注——流通部面のこと）は競争の部面であって、それは各々の場合をみれば偶然に支配されている」⁴⁹⁾ということである。とすれば、これは、内的で必然的な均衡と相互依存にもかかわらず、現実には諸契機は互いに無関心に存在し、それらは均衡することもあれば、しないこともある。もし不断の均衡化にもかかわらず、不均衡化と分裂が進行した場合でも、均衡と相互依存とは必然的なものだから必ず均衡が回復される、ということの意味している。ということは、第2部の論理次元では、社会的資本の循環の中の諸契機が内的な統一になればならない必然性と、他方でそれらが互いに無関心に自立しようという内的統一の偶然性とが明らかになるということである。これは、内容的には、資本制生産の無政府性に立脚するものであることは容易に理解される。『剰余価値学説史』で、「別々の資本の再生産過程または流通過程のこのようなからみ合い

プランのうちの「10. 資本主義的生産の総過程における貨幣の遡流運動」であることがほぼ確認されている。（水谷謙治、再生産論の成立について(1)～(完)、「立教経済学研究」第20巻第1号～3号、1966年5、7、12月号）従って、先の「補足」関係が第2部第3篇の確立した現行『資本論』の第2部と第3部との間でなお存在していると考え、第2部第3篇の「内在的矛盾」を第3部第15章の「内的諸矛盾の展開」で「補足」するという意味に解するのはまちがいであろう。

マルクスのノート716ページ（*ibid.*, SS. 513-514）の叙述が当時の「資本一般」全3篇の恐慌の説明に与える意義についてのべていること、ところが最後の段落（注46）が内容的に現行第2部第3篇を示すこと、再生産過程自体の説明も当時の第2篇（流通過程論）では不完全で、次の「資本と利潤」篇で補足を要すると述べられていること、などを考えあわせれば、以上のように考えるのが妥当と思われるのである。

48) *Das Kapital*, Bd. II, S. 491, 613ページ。

49) *Ibid.*, Bd. III, S. 836, 1060ページ。

ともつれ合いは、分業によって一方では必然的であり、他方では偶然的である。こうしてすでに恐慌の内容規定は拡大されている。」⁵⁰⁾ とマルクスがいうのは以上のことを意味しているのであろう。「商品生産が資本主義的生産の一般的形態だという事実」が、商品生産に内在的な矛盾による無政府性を一般化するのであるが、しかしこれによつてはⅡやⅢで考察してきたように「恐慌の可能性」の範囲を出ることはできない。例えば、生産と個人的消費との関係についても、生産が個人的消費との関係で「過剰」でも「過少」でもありうるわけで、これでは「恐慌の必然性」を説明することにはならないであろう。内的統一にあるものが外的対立において運動するというのはただこうした意味でしかない。「正常でない進行」の可能性は条件が複雑なだけより多く見いだされるが、それらがいかなる内的関連をもちながら、何故、何によつて、どのようにして現実の恐慌に転化するのか、という点はまだ明らかにしえない。この意味で、恐慌の可能性は第2部第3篇の分析によつて拡大された内容＝基礎と発展した形態を受けるとはいえ、なお可能性＝抽象的形態にとどまっている⁵¹⁾。

必要なことは、均衡自体の必然性ととともに、不均衡、不調和への傾向を偶然ではなく必然性として示し、これを展開することである。「資本は剰余労働を無際限に追求し、過剰生産性、過剰消費などを無際限に追求するのであるから——釣合 Proportion をのりこえようとする資本の傾向も（注—資本が正しい釣合に配分される傾向と）同様に必然なのである。」⁵²⁾ このように二つの相反する傾向＝必然が衝突することに、近代的過剰生産の基礎である発展した資本に固有な根本矛盾が存在すると考えられる。したがって、第2部、ことに第3篇の分析内容の意義は、まずこの根本矛盾の一面としての「均衡作用それ自体の必然性」

50) *Theorien*, II, S. 511, 690ページ。

51) 「可能性は、……単に外的な現実性、すなわち偶然性である。偶然的なものとは一般に、その存在の根拠を自分自身のうちにでなく、他のもののうちに持つものである。」（ヘーゲル「小論理学」、松村一人訳、（下）、89ページ）二瓶氏は、第2部第3篇で恐慌の可能性は「実在的可能性」に発展するといわれるが、実在的可能性とはすべての条件が完備したときの事物をいうのであり、第2部第3篇での恐慌の可能性をこのようなものとして把握することはできない。（ヘーゲル「大論理学」武市健人訳、中巻、238-241ページ参照）。

52) *Grundrisse*, S. 316, II, 342ページ。

を明らかにしていることに求めねばならないというのが我々の考えである。まさにこうした「均衡作用それ自体の必然性」があるからこそ、「恐慌は、つねにただ、……攪乱された均衡を瞬間的に回復する強力的な爆発でしかない」⁵³⁾ということもいえるのである。しかしこの点の詳しい考察と、諸説——強力的に回復されるべき不均衡化が何故・何によって・どのようにして生ずるのかということを事実上『資本論』第2部第3篇に求める見解——の一層立入った検討は、次稿⁵⁴⁾にゆずらねばならない。

53) *Das Kapital*, Bd. III, S. 259, 312-3ページ。

『経済学批判要綱』においても、交換における諸契機の「内的な必然性は、それら相互の無関心な外観を強力的におわらせるところの、恐慌において現れる」(*Grundrisse*, SS. 347-8, II. 3 78ページ)とのべられている。

54) 拙稿、「資本の流通過程」といわれる「生産と消費との矛盾」について、「経済論叢」第114巻第5・6号、1974年11・12月号、掲載予定。